

伝統的知識の公開と 「社会関係資本」としての活用

UKにあるマンロー書簡の社会ネットワーク分析を中心に

Publication of Traditional Knowledge and Utilization as "Social Capital" : With
a Focus on the Social Network Analysis of the Munro Correspondence in UK

手塚 薫

TEZUKA Kaoru

はじめに

- ① 学術情報公開への道
- ② 従来のマンロー研究
- ③ 社会ネットワーク分析の特徴
- ④ 社会ネットワークグラフとネットワーク密度
- ⑤ エンパワーメントの源泉としてのマンロー資料

おわりに

【論文要旨】

マンローのアイヌ研究がどのような動機や目的に基づいて実施されたのかについては、これまで、本人の性格や思想を推測して考察することが一般的であった。純粋な知識欲以外にもアカデミズムへの貢献といった名誉欲などの要素を度外視することはできないが、公刊資料からだけでは、動機の解明にいたることは困難である。

RAIやNMSに所蔵されているマンローと第三者間でやりとりされた私的な書簡類は、マンローのアイヌ研究の目的や意図を正直に伝えているものが多く、それらを理解する上ではかりしれない価値を有する。マンローのアイヌ研究成果を、現代的な活用に耐えうるものとして取り扱っていかどうかを判断するためには、当時の研究対象となった人びとの関係性や研究倫理など、それらが産み出された経過を正確に把握する必要がある。

研究対象地域やコミュニティ内外の人物と実際のところどのような関係を構築していたかは、マンローのアイヌ研究の質と量にも大きな影響を与えたと考えられる。そこでマンローと彼を取り巻く人物との関係を理解するために、上記の書簡を元にエゴセントリック・ネットワーク分析をおこなった。その結果、ネットワークの密度、中心性、ハブとなる人物、アイヌインフォーマントとの関係、コミュニティ内外の多くの人物からの影響などの特徴が浮き彫りにされた。これらの結果は、マンローのアイヌ研究がマンローの個人的な資質および属性からだけではなく、マンローを取り巻く様々な人物のネットワークによって駆動されていたことを視覚的かつ実証的に説明している。

マンローによって収集されたアイヌの伝統的民族文化知識を、名誉・人格権・プライバシー権などを十分考慮しながら公開していく在り方が問われている。社会ネットワーク分析による研究成果はそれらのデータを、アイヌ民族を含む現代人が社会関係資本として積極的に活用する上で大いに資するものと考えられる。

【キーワード】 アイヌ, マンロー, 伝統的民族文化知識, 社会ネットワーク分析, 社会関係資本

はじめに

二風谷を中心にニール・ゴードン・マンロー⁽¹⁾ (Neil Gordon Munro) によって採録されたアイヌ民族の生活様式に関する貴重な情報は、特定地域に根ざしたアイヌの植物など資源利用や儀礼活動にかかわる伝統的な民族知識を再構成する上で重要な情報を提供してくれる。マンロー資料は昭和初期に古老への聞き取りを中心に収集されたが、既刊資料からは、古老をはじめとしてマンローの研究や生活を支えた人物に関する情報は限定的なものにとどまっており、また研究の目的や方法なども必ずしも明確なものではなかった。イングランドとスコットランドにあるマンローの書簡をはじめとするドキュメントは、収集の目的や方法、あるいは収集時の苦労や正直な心情を伝えるなど、日本側資料の空白を埋める貴重なものではあったが、保存状態や著作権等の理由からそれらの資料へのアクセスが制限されていた。

そこで本稿では、まず、「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」の推進によって可能になったイングランドとスコットランドの研究機関に保管されているマンローの書簡類に社会ネットワーク分析 (Social Network Analysis) をおこなう。そのねらいはマンローの第一次資料のみに基づき、書簡に記載されているすべての登場人物を抽出し、そのネットワークを可視化することと、そのネットワークにおける個々の人物同士の構造を、「密度」、「クリーク」、「中心性」の指標を使って明らかにすることにある。もとより社会ネットワーク分析がすべての人間関係を明快に解き明かす魔法のツールであるとの幻想を抱いているわけではないが、情報の伝達や登場人物同士の交流はマンローを取り巻く人間関係のネットワークに影響されており、それらの社会関係が種々の行動を駆動する資本としても機能しているという視点を提示できるものと思われる。次に、その結果をもとにマンローが収集した研究資源のこれからの現代的な活用の可能性を検討する。

①……………学術情報公開への道

2003年に横浜と札幌で実施された展示会「海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから—」を企画したことが、筆者がマンローとかかわるきっかけとなった。イングランドとスコットランドにあるほぼすべてのマンローが収集したアイヌ工芸品を国内のマンローが収集した工芸品と合わせて展示し、その資料をいかなる目的で収集したかに迫ることが展示の意図であった。展示に先立って2000年12月に事前調査を実施し、王立人類学協会 (Royal Anthropological Institute, 以下RAIと表記) と国立スコットランド博物館 (National Museum of Scotland, 以下NMSと表記) に保管されているマンローの種々のドキュメントを実見する機会に恵まれた。立ち会ったRAIの司書は、個々の資料の高精細な撮影を認めなかったため、メモ程度の写真を数枚撮影した以外に、文書の手書きによる複写ができただけであった。マンローによるアイヌコレクション収集の経緯がわかる貴重な書簡を展示会でも紹介したいと使用の許諾を求めたが、マンローの遺族を探し当ててその許可をとることが条件とされたために断念せざるをえなかった。

2001年春には個人的に調査の必要性を感じ、RAIに連絡をとったが、そのときは返事がな

く、現地調査は実現しなかった。2001年10月25日付けの手紙がBeverley Emery (RAI Library Representative) 氏から筆者に届き、マンロー資料のデータ・ベース化の計画があることを知った。RAI資料への本格的なアクセスが認められそうな機運が開けたのは、2003年12月のRAIからの連絡であり、資金を獲得してデータ・ベース化をはかりたいので協力してほしいとの趣旨だった。この間の意識の変化は、何によるものか明らかではないが、人事異動や社会情勢の変化があったのだと理解している。後者については、2004年7月の英国下院科学技術委員会の調査報告書が学術情報のオープンアクセス化を明確に推奨していることも間接的に影響を与えていたのかもしれないが[倉田2007:153]、人類学者らがフィールドワークを通じて収集した人類学・民族学資料をインターネット等で積極的に公開する動きが見られたことも大きいのではと感じている。例えば、英国の民族学コレクションがインターネットで公開されている例として、The Regimental Museum of the Royal Welch Fusiliers, World Museum Liverpool, Bristol City Art Gallery & Museumなど17機関によって旧植民地アフリカで実施された過去のフィールドワークの成果を、それらの機関が連携して統合されたデータ・ベースを構築し、資料だけでなく、写真をも含めてインターネットで公開している例が挙げられる。また、マンローのアイヌ研究を支援した人類学者セリグマン夫妻もマンローから受け取ったアイヌの物質文化資料を寄贈したことで知られるオックスフォード大学構内にあるピット・リヴァース博物館(Pitt Rivers Museum)では、アフリカ中央部で初期の大規模な植民地探検を組織したロバート・ホットト(Robert Hottot)が収集したほぼすべての先住民の写真や撮影機材を含む資料群をインターネットで公開している。

このように特に西欧では、過去に実施されたフィールドワークによって収集されたまとまった数の被調査者が記録された写真や調査者の書簡、フィールドノートをもそれらコレクションの現在の所蔵場所となっている博物館や図書館などがインターネットで公開することが珍しくないという⁽²⁾。

学術情報は公共財であり、公表してだれもが公平に使えるようにするという観点から言えば、歓迎すべき状況である。特に、マンローが定住した二風谷のアイヌコミュニティを中心にコミュニティ内外の人々とマンローの交流と連携によって記録されたアイヌの伝統的民族知識にかかわるデータが、特定所蔵機関や個人によって事実上占有されて活用されないことは資料の価値を大いに損なってしまうことになる。著作権や知的所有権制度の制約を合法的に乗り越える努力が求められる。

1.2. 「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」

上述した展示会での事前調査に加え、国立歴史民族博物館(以下、歴博と表記)の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(代表:内田順子,2004~2006年度)による歴博所蔵のマンローが1930年に撮影したアイヌのクマ送り儀礼に関する映画フィルム調査の過程で、歴博関係者が、マンローが生前アイヌ研究の成果を送っていたRAIの所蔵資料との比較研究を実施した。これらの研究交流のなかで、RAIはマンローの残した文書、写真、映画の重要性を次第に認識するようになり、2005年にRAIからそれらの資料を有するイングランド、スコットランド、日本の6つの研究・教育機関が協力し、デジタル化して保管しようとする提案がなされた。

UKと日本に所在するマンロー・ドキュメント群のデジタル化の試みはこうして始まったわけで

あるが、多くの利用者の利用から資料の状態を保護するためには繰り返しの閲覧に耐えうるようなデジタルコンテンツ化が望ましいと判断され、プロジェクトの発足とともに今日まで人間文化研究機構の連携研究、科学研究費、歴博の共同研究などの経費を充当しながらその作業が続けられている。これらはできるだけ多くの人に活用されることが望ましいために、そのデータ・ベースがインターネット上で運用されることも当初から検討の課題となっている。

本プロジェクトでは、デジタル化した成果物をマンローの晩年の居住地であり、研究活動を展開した二風谷地方の被調査者とその子孫となったアイヌ民族に公開し、アイヌ文化の伝承にも積極的に活用していくため、二風谷のアイヌ民族と教育委員会職員を研究協力者として招き、公開基準の策定にも携わっていただいた。この公開基準は、動画、写真、書簡に記録されているアイヌ民族を含む個人の名誉権、プライバシー権、その他の人格権、人格的利益を守り、かつ、本プロジェクトの成果物が学術研究、およびアイヌ文化の伝承のために有意義に使用することができるように配慮されたものである。マンローのアイヌ研究の拠点であった二風谷でマンローの映像を公開したり、研究集会を開催したりして、デジタル化の対象や方法、成果のまとめかたについて協議をおこなった。

なお、「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」の経緯、目的、調査・研究の過程、成果、研究組織についての詳細は、本研究報告の冒頭で、本プロジェクトの日本側コーディネーターを務める内田順子が執筆している「研究の概要」を参照されたい。

②……………従来のマンロー研究

マンローの生涯については、多くの人が関心を示してはいるものの部分的な評伝にとどまっている。マンロー本人と親交があり、本人をよく知るものによって描かれた本格的なものとしては、鷹部屋福平の『橋のいろいろ』（1958年 石崎書店）と谷万吉の「二風谷コタンのマンロー先生」『赤れんが』第48～50号（1977年）、第51・53号（1978年）が双璧であろう。また、マンローの没後に著されたものとしては、マンローの最後の夫人であったチヨの証言などを多く取り入れた桑原千代子による『わがマンロー伝—ある英人医師・アイヌ研究家の生涯—』（新宿書房 1983年）が著名である。これらの著作に基づいて、マンローを取り巻く人間関係やマンローの研究の特徴を取り上げてみたい。

2.1. 鷹部屋の記述

『橋のいろいろ』はマンローの伝記を主要な目的としたものではないが、101～133頁にかけて「マンロー先生」と題した1章を割き、マンローを知らない人々にマンローを紹介しようとの意図で回想録ふうに記述している。鷹部屋とマンローの二風谷での出会いは「事変以来」とあるから日中戦争が始まった1937年（昭和12年）からほど遠くない時期のことと思われる。

二人の出会いから別れまで続いた友情について鷹部屋は次のように述べている。

「『先生と相識る』という言葉はこの時の自分にはふさわしいものではなかったかも知れないが、その後先生が私に対して寄せられた折々の手紙や厚遇によって——乃至は先生がこのアイ

ヌ部落の土と化せられた当時の私に対する先生の気持などから——私はまた先生の心の友でもあったように思える。

先生は死の床にはるばるとかけつけた私の手を握って『マイ フレンド』と呼ばれたのである」(118頁)。

このような親密な交友から、アイヌ研究の方法についても貴重な証言を寄せている。

「先生は旅費を送ってやって各地からアイヌの古老を呼びよせられた。それらの古老についてアイヌに関する風俗習慣は勿論、宗教上のことから天文・数理・彫刻・刺繍・狩猟に関することなどまで細大もらさず聴かれたのである。そうして少なくとも二人のアイヌの言うところが一致するもののみをとって著述にうつして行かれたのであった」(128-129頁)。

マンローのインフォーマントのなかで傑出した役割を果たしたとされる K 氏（二谷国松氏のことと思われる）については、マンロー自身の口から「私の百科事典です。身体を大切にしてください。あなた死ぬと私論文かけません」(130頁)との正直な言葉が発せられている。K 氏は唯一名前のイニシャルで表記されていた人物である。

しかし、そのフィールドワークが何語でおこなわれたかについては直接的な記述はないが、次のような記述があることから本人の日本語だけでは十分な聞き取りができなかったと推定される。

「先生は四十年以上にもなる日本生活にもかかわらず、日本語は上手でなかった。むしろ下手な日本語であった」(109-110頁)。

また、マンローが熱心におこなったアイヌの精神文化についての研究では、種々のイナウの制作をアイヌエカシに依頼しており、著作の挿絵写真を撮っていたことが明らかとなる(126頁)。

マンローを取り巻く人間関係については、1942年のマンローの通夜に参列した村人たち数名の紹介があるものの、具体名は一切伏せられている。それらの登場人物を列挙すると、「未亡人」、「村長」、「村の教会堂の女宣教師」、「郵便局長」、「理髪床の主人公」、「校長さん」、「アイヌの古老」などであるが、それらの人物がマンローと具体的にどのような関係にあったのかにまで踏み込んで言及していない。

「あの北海道の日高国の不便な、一寒村なる二風谷のアイヌコタンに家をたてて、(中略)八十歳の高齢で長逝されるまで黙々と学究に終始されたことを考えるとただただ頭が下がるばかりである。しかも、先生の本職は医業であった」(103頁)と記すように、貧しい患者に対価を求めないヒューマニスティックな「人間としてのマンロー」の足跡が「世に知られないで埋もれていることは、まことに堪えられない残念なことである」(102頁)との思いでこの一章を書き起こした。しかし、一方で、二風谷でマンローと濃密な接点があったはずの村民との関係はどこにも触れられてはいないために、本人の学問に対する強い情熱と苦難に負けない強靱な意志が強調される結果となっている。

2.2. 谷の記述

北海道庁職員だった谷は、マンローと家族ぐるみの交際を続けており、戦時体制下にあっても、困窮するマンローに食料品を贈ったり、離婚調停や様々な噂の抑圧にアイヌで平取村役場職員二谷文次郎と連携してあたるなど、晩年のマンローを物心両面で支えた人物であり、よき理解者でもあった。二人は1935年（昭和10）に二谷の仲介で面会して以来、マンローの死まで交友が続いた。また谷は二風谷のマンローから発信された書簡28通と滞在先の軽井沢サナトリウムから発信された書簡3通を保管していたのみならず、自宅のある札幌円山町から谷自らが投函した書簡全20通の写しをもっており、1978年にそれらを一括して北海道行政資料室に寄贈した。現在は北海道立文書館⁽³⁾に保管されており、一般の人々の閲覧も許可されている。晩年のマンローの事情に精通しており、「二風谷コタンの故マンロー先生」（北海道総務部行政資料課編『赤れんが』所収）においてもこのきわめて重要な手紙のなかから数通の手紙を訳出して紹介している。これは「先生との出会い」から始まり、マンローの略歴や業績に関し、出生から日本訪問、横浜時代、軽井沢時代を経て二風谷時代に至るまで通史的に詳細に述べられている。とりわけ二風谷時代の地元の人々との関係についてはたびたび言及している。

1932年（昭和7）の二風谷移住後の状況については、「新築中の家が未だ完成していなかったの、前から知っている商家の離れを借りて仮住居して、アイヌ人の古老を相手にその宗教、『まじない』その他の研究を始められた」とあり〔谷1977（第49号）：19〕、その年の12月に仮住まいから出火した原因については、マンローが谷に書き送った手紙を引用して次のように記す。

「…当初は私は大変ショックを受け憤慨したが、しかしその男（多分その徒党も）が、私を日本国の敵と思い込んで私心からでなくて放火したのだと思うようになった。いずれにせよ、失った財物は元に帰って来るものでもなし、また失った長年の骨を折った仕事の結果も、元に戻って来ないので、私はそれを許す。しかしあの災難は忘れることができない」〔谷1977（第49号）：22〕。

1936年の秋、マンローが北海道長官の許可を受けずに病人の治療をおこなっているという噂が二風谷で広がった際には二谷とともに診療所開設届けの作成にあたった。この後も時局の悪化とともにマンローはたびたび一部の村人の心ない噂に悩んでいる。二谷から送られた1938年の手紙によれば、「先生が最近二風谷でスパイのデマを撒き散らされている。その源は大方奥のシャモの酒売り店の者と思うが、善良なるウタリ内までその口車に乗せられて、失礼なデマを振り撒いている。先生の耳にはもう入っているだろうがお気の毒だ」とあり、マンローが健康のために日頃村人に禁酒を勧めていることに対し、反発した酒屋がデマを扇動していると推測している〔谷1977（第50号）：23〕。このことから、アイヌにもマンローに反感を持つ者がいたことがわかる。また、マンローからの別の手紙で谷は、この他にも日東鉱山の職員が平取や鶴川で、マンローがスパイ行為を働いているとの荒唐無稽な噂に悩んでいることを知る〔谷1977（第50号）：24〕。

アデル夫人との離婚と千代との婚姻・入籍をめぐるマンローは村人の手助けで処理をしてい

るが、この件にも谷は知り合いの弁護士を紹介するなど積極的にかかわっている。

度重なるデマに苦悩し、経済的に困窮していたマンローは、アイヌのために衛生管理者または役所のコンサルタントとして勤務できないか谷に相談を持ちかけており、谷は道庁の社会課にかけあって実現を目指すものの、結局予算がつかずその計画は頓挫してしまう。

自宅・土地を処分して夏の間診療をおこなっていた軽井沢に戻ろうとするが、平取村長、日高支庁、日高支庁内の他の町村の配慮にもかかわらず買い手が見つからなかったという〔谷 1978（第53号）：15-16〕。

アイヌ研究の方法については、一節を割いて具体的に説明している。

「先生は、午前中は研究の時間、午後は診療と一応時間を分けておられた。毎日午前三時頃には起きられ、研究の資料のまとまったものをタイプするのを日課とされておられた」と述べ〔谷 1978（第53号）：16〕、ストイックな研究方法が紹介されるが、助手やチヨ夫人の支援については特に記載がない。同頁には「古老の意見の一致しない問題については、わざわざ他地方のアイヌ人に来てもらい比較検討され『ノート』を取られていた」とあり、鷹部屋の証言とも一致している。「先生はこうして研究された資料をまとめられ、これをタイプしてロンドン大学のセリグマン教授のもとに送っておられた」とも記し、人類学者セリグマンがマンローのアイヌ研究に関与していたことを想起させる。

2.3. 桑原千代子の著述

『わがマンロー伝—ある英人医師・アイヌ研究家の生涯—』の著者桑原千代子は、マンロー本人とは面識がなく、1951年に軽井沢でチヨ夫人と偶然巡り合い、マンローの伝記を書くことを決意した。マンロー研究をライフワークとしている出村が指摘するように「約30年間の関係者からのヒアリング及び綿密な調査に基づいたマンローの詳伝」〔出村 2006：156〕となっており、後世の研究者によって引用を繰り返されている。この本はマンローの最後の夫人となったチヨからの情報提供が中心となっている。具体的に名前が記された登場人物の数についても先に取り上げた2作品に比べ群を抜いて多い。

マンローの存在を知り、伝記を書くに至った経緯や資料集めの労苦、そしてマンローの死後、その邸宅を記念館にする運動やマンローが収集した資料や撮影フィルムの行方などに多くの紙数を割いているが、マンローの生い立ちから横浜時代、二風谷時代までをひととおり扱い、巻末に年譜や参考文献も掲載するなど、充実した伝記としてはほとんど唯一のものである。本書の構成を目次に従って示すと以下ようになる。

第1章	マンロー夫人との邂逅
第2章	資料を求めて
第3章	コタンとマンロー夫妻
第4章	エジンバラより横浜へ
第5章	研究と家庭生活（その一）
第6章	研究と家庭生活（その二）

第7章	軽井沢における医療活動
第8章	二風谷時代（その一）
第9章	二風谷時代（その二）
第10章	二風谷時代（その三）
第11章	ウタリの友として医師として
第12章	生活と著作と
第13章	晩年
第14章	マンロー亡きのちに

第3章は、昭和50年6月の顕彰碑除幕式の話題が中心となっており、第4章は生い立ちから横浜ジェネラルホスピタル病院長時代までを取り上げている。第5～13章までが本稿とかかわりのある部分である。横浜と軽井沢を拠点に先史時代の日本を主な研究対象としていた第5～7章までで、家族を含む名前のわかる登場人物は40人にも達している。また、二風谷に本拠を移して診療とアイヌ研究に没頭し、死去するまでを扱った第8～13章までの部分ではアイヌを含み63人が登場する。イニシャルだけで名を明かさない人物や両時期に重複して登場する人物も含まれている。また、幼少の頃の記憶などを披露するだけの者もあり、マンローとの接点の度合いは人によって異なる。

依拠した資料については、チョモ未亡人によるものと谷の証言、および谷書簡によるものが中心を占め、それ以外は部分的なものにとどまっている。例えば、マンローと3度目の結婚をしたアデル・ファブルブランドの父と交際のあった大山柏の夫人や二風谷の有力者貝沢正、医師として指導を受けた岡田久の回想や、当時の新聞記事、あるいはマンローの死後刊行された『Creed and Cult』、佐伯寿安堂日記、内村鑑三日記などを引用している。マンローの「結婚・離婚問題」に執着を示し、憶測や思い入れも排除できていないが、日本側資料に基づく登場人物に関する記載の多さでは間違いなくトップクラスの資料となっている。しかし、第一次資料だけではなく、様々な資料を組み合わせ、残念ながら十分にそのソースが開示されておらず、またマンローとそれらの登場人物との間にいつどのような交流があったのかについては曖昧になってしまっている。

マンローのアイヌ研究と聞き取りに使用した言語については、第11章4節「長老達の信頼を得た研究法」にこんなくだりがあるので煩をいとわず引用しておきたい。

「結核治療でずっとマンローの世話になっていた二谷国松氏はじめ、長老シランペノ氏や善助さん、患者である人人がよく訪ねてきては、代わるがわるマンローに語って、その研究のためによりよい資料をもたらしてくれるのだった。とりわけ国松氏は、アイヌの生活について先祖伝来の様々なしきたりや、例えば熊祭り等の儀式の様子、信仰上のいろいろな神々について、また病気にかかった時よくやる『まじない』等についてや、薬草とする植物（マンローは日当を払ってコタンの人々に採集させたと、貝沢正氏は語るが、これはすっかり散逸してしまい、現在ない）、毒矢の毒のこと、鹿猟や鹿笛のこと、鮭漁のこと等を毎日マンローに語り、彼は丹念にそれを記録していったのである。

コタンの人達の使う言葉は、老人達はアイヌ語を、中年以下の人々はほとんど日本語を使うようになっており、東北方言訛りの強い日本語を、チヨが英語に通訳してマンローに聞かせるのだが、在日四十年以上経ても片言の日本語しか話せずよくわからないマンローに、通訳するチヨの苦労はさぞ大変だったろう」(220頁)。

このように末尾では、調査における夫人の献身的な協力が紹介されている。

2.4. まとめ

以上代表的な3名のマンローの評伝を取り上げたが、当然ながらイングランドやスコットランドに所在する手紙などのマンローの第一次資料に依拠してはいない。これらには、伝記を書く上で必然性があるわけではないにしても、いくつかの共通点を指摘できる。当時まだ存命中だった関係者に遠慮しているのかイニシャル表記や職業を示すことで特定個人の名を避ける傾向が顕著である。桑原の作品中にもイニシャルは少ないながら、「食料品・雑貨屋のM氏」、「写真屋F氏」、「T教授」などが繰り返し登場する。さらにマンローの伝記を書く上で必要と考えた者のみを取り上げているため、マンローを取り巻く人間関係の全体像が見えてこない。とりわけ、マンローとの関係が記されている者ですら、マンロー以外の人物との関係は不明瞭である。また、マンローとのかかわりがいつ生じ、情報がどのように流れたのかなど、その方向性が明白ではない。

アイヌ研究については、複数のアイヌ古老の支援を仰ぎ、正確を期すなど慎重かつ実証的な手法が採用されていることがわかるが、日本語の運用能力については評価が低い。桑原のみがチヨの関与を積極的に評価している点が注目される。

マンローの心のよりどころとなり、問題解決にも尽力したはずの鷹部屋、谷、チヨ、およびアイヌ研究を勧めたセリグマンの存在はあくまで脇役で、マンロー個人の研究をやり遂げようとする不屈の精神力とあくなき探求心、村民に対するヒューマニズムにあふれる姿勢など、偉業を成し遂げた人物の個性を際立たせる結果になってしまっている。しかもマンローから登場人物に対する一方的な働きかけが一貫して主題となっており、その逆の可能性は十分に検討されていない。

このような記述スタイルから、個人の行動や業績を説明する上で、個人の信念や心理、意識などの属性だけに究極の原因を求めようとせず、誰がその個人を取りまいて関係を構築しているのか、また人物同士が一方的ではなく、双方向的に影響を及ぼし合う人間関係、すなわち社会ネットワークの全体像を視野におさめてみたいという問題意識を強く持つに至った。

③……………社会ネットワーク分析の特徴

マンローのアイヌ研究によって得られた民族知識は、マンロー一人の努力や功績によるものではないということ表現するためには、マンローを取り巻く人間関係全体を把握する必要がある。社会ネットワーク分析は、まず特定の行為者(マンロー)を取り囲むネットワークの全体構造を把握し、続いて行為者の思考や行動にそのネットワークが影響を及ぼすメカニズムを明らかにしようとする分析手法である。日本では、学閥・閥閥・派閥が現実の社会で大きな影響力を持っているに

もかわらず、人脈やコネといったマイナスのイメージで捉えられ、本格的な研究アプローチとしては今なおマイナーな存在であろう。

結婚、就職、昇進といった機会にその本人に有用な情報をもたらすのは、遠方の知人なのか、あるいは頻繁に会っているような親しい知人なのかという問いに対し、社会ネットワーク分析の結果は、接触する時間や頻度の少ない疎遠な人との関係を表す「弱い紐帯」との関係が有利であることが指摘されている [Granovetter 1974]。常に接触があるネットワークでは、お互いが持っている情報はすでに既知のものであり、自分に有用な目新しい情報とはなっていないためである。したがって、社会ネットワーク分析では、周囲の人物とすきまなく緊密に結びつくような閉じたネットワークよりも、規則正しいつながりのなかに一部だけランダムなつながりがあるネットワークの方が、情報伝達特性や新しい機会の探索能力の点で格段に優れていることが指摘されている [ワッツ 2004:98-104]。そういうネットワークでは、外部からある行為者にとって有用な情報が入ってきやすいためである。これは行為者がやみくもに数多くの他人とつながっている社会関係が、自己実現を成し遂げる上で、必ずしも有利なのではないことを意味している。社会ネットワークは資源にも道具にもなり、結びつきを強めれば、逆に人間関係に制約され拘束されることにもなりうる [安田 1997:7]。ネットワークの大きさより、むしろ質の検討が重要であるゆえんである。

例えば、マンローはセリグマン宛ての1934年5月17日付けの手紙で自身のアイヌ研究が遅々として進まないことにいらだち、「ひっきりなしに仕事が中断させられ、5,6人の患者、子ども、急患、私が顔で笑って心で怒り狂っている間に1時間以上も居座り続ける訪問者たち、これらを除けば私は他に何もできないでいるとしか言いようがありません」(RAI: 249/5/14)と認めている。現地社会に受け入れられ、村人との関係を円滑にするためにおこなった診療行為で自分の研究の時間を確保できなくなってしまっている。人類学的フィールドワークの基本として、被調査者との接触は当該社会をかく乱することにつながるために積極的な働きかけは極力慎まなければならないとされている [関本 1988:269-270]。しかしマンローは、アイヌに飲酒をやめるようことあるごとに求め、現地の商店主との関係を悪化させている。結果的に、困っている人を見過ごせばそれですむところを、あえて自分から関わりあいになることで、自分をあやうくする、あるいは自分から情報を出してしまうことによって、批判を受けやすく、傷つきやすくなるという社会ネットワーク研究のパラドックスを具現化してしまっている [金子 1992:125]。

社会ネットワーク分析では、一人の人間のおこなう行為は、その個人がその人の能力や資質によって単独でおこなった行為であると解釈するよりも、その人物を取り囲んでいる人々の影響であると考えことに特徴がある。取り囲む他者の力を重視するのは、個々の人種、階層、生まれ、家柄といった属性に過度にとらわれることから解放されるためであるが、行為を決定するのはネットワークの力だと言い切ることには抵抗を感じる人も少なくはないであろう。

確かにマンローの知性、信念、無私の医療活動は十分考慮に値するが、女性としてのチヨの存在によって、人前では決して見せないアイヌ女性の神聖な帯の収集が可能になったエピソードに端的に現れているように [Seligman 1962:XIV]、コミュニティー内外の知り合っているもの同士の、社会的ネットワークの相乗作用の上に、多くの伝統的な医療や儀礼にかかわる民族知識を蓄積することが可能になったという視点をもう少し重視するべきであろう。これまでの書簡の分析から、想

像以上に多種多様な人々とマンローとの関係が浮かび上がってきている。そのなかにはコミュニティーのアイヌ、和人、地方政府役人、学会関係者、研究者、外国人、聖職者、友人、家族、マスメディア、研究資金提供関係者などが含まれている。北海道に拠点を置いたあとは時代背景もあり、地方のポリティクスに深く関与せざるをえなくなっており、コミュニティー内外の多数の人々との複雑な関係が展開する。

その結果として、主体者たる個人のパーソナルな資質を踏まえてマンローの行動を分析してきたこれまでの分析方法とは異なり、社会ネットワーク上での関係や結びつきを注視して一人の個人が成し遂げてきた業績をとらえてみたい。社会ネットワーク研究は行為者の行動や思考にそのネットワークが影響を及ぼす側面を重視している。双方の研究によって導き出される結論は必ずしも矛盾するものではなく、対比することによって、共通性や差違が生じれば、その意義を考察してより内容を深めることができるだろう。

3.2. 目的

社会ネットワーク分析は、近年イングランドにおける博物館コレクションの形成がどのようなフィールドワーカーや博物館関係者、行政官、コレクターなど幅広い人脈を通じておこなわれたのかについて研究する際に用いられ、大きな実績を上げている [Larson, F. et al. 2007]。博物館資料収集の過程で貢献した、観念的に把握できない膨大なレベルの人のネットワークを数量的に整理して視覚化できるメリットがある。当時の日本やアイヌ文化への関心の高まりを反映し、欧米の博物館が日本やアイヌ資料を収集する過程で、マンローが現地駐在員として特定の人物ネットワークを通じ寄与していたことを解明するだけでなく、マンローの研究の方向性に誰が関与していたかを定量的に明示してくれる。人類学黎明期のフィールドワークがいかなる方向性や人脈でおこなわれていたかを知る一助ともなりうる。なぜなら、マンローのアイヌ研究は人類学の泰斗セリグマンが関与し、種々のアドバイスを提供しているからである。こうした双方向の人的交流の詳細については、いまだ十分に解明されているとはいいがたい。そこに社会ネットワーク分析を適用する価値があるといえる。これまで公刊された資料にはない、名前を特定できる人物が多数含まれていることから、外国人を含むネットワークを浮かび上がらせることが可能である。

3.3. 対象

マンローのドキュメントは書簡、ノート、映像、写真、メモなど膨大な量に上るが、差出人と受取人、手紙の作成日が判明しているものが多く、マンローに直接または間接的に影響を与えた多くの人物について言及されている RAI と NMS に所蔵されている書簡を対象にする。歴史的なネットワークを再構成するためにはある程度まとまった量の第一次資料が必要になるが、短期間に日本と海外を中心にやりとりされた書簡が RAI と NMS には奇跡的にまとまって保存されていることから、この点でも書簡を対象にする意義は大きい。

それらは、RAI が 42 通（うち本人がセリグマンなどイングランドに住む友人等に送った 41 通、他人がマンローに宛てたものが 1 通）であり、NMS が 44 通（本人がスコットランドの友人に書き送ったものを中心に 39 通、他人がマンローに宛てたものが 5 通）である。ほとんどのものは基本

的にタイプで作成され、補足や手直しによる以外手書きのものは少ない。日本からイングランドとスコットランドに送られたものは関係者の手によって現在の2つの機関におさめられたと考えられる。日本に残されていた手紙、カーボンコピーは、マンローの遺志を受けたイタリア人研究者フォスコ・マライーニによって戦後スコットランドに渡ったと考えられるが不明な点も多い。RAIの書簡コレクションは1931年から1940年までに書かれたものである。1931年はマンローが北海道の二風谷村に土地を購入し、移住を決意した年にあたっており、それ以降マンローのアイヌ研究が本格化することになる。一方NMSのコレクションは1908年から1929年までのものと北海道移住後の1933年から1940年までに書かれたものとに大別できる。後半部分は時期的にも活動の内容からもRAI書簡と密接な関連があるので、この部分はRAIのものと一緒に扱うことにした。つまり、所蔵機関別のコレクションごとに分析を進めるのではなく、2つの機関のコレクションを前半の横浜・軽井沢にベースをおいていた時代（1908年～1929年、19通）と二風谷に拠点を築いてアイヌ研究と地域医療に奔走した時代（1931年～1940年、67通）の2つに区分して扱う。なお、マンローによって発信された書簡はある年に偏ることなくコンスタントに書かれ、比較的多く保存されているのに対し、マンローに宛てられた他人が書いた書簡はごく少数しか残されていない。その資料点数の差には、何か理由があるかもしれないが、マンローの前半と後半の活動の様相をとらえる目的にとって、マンローが書いたものとごく少数のマンローに宛てられたものを一括して社会ネットワーク分析を実施しても大きな支障はないと考える。

社会ネットワーク分析の欠点としてあげられる時間的な推移をまとめて表示してしまうことについても、年代のわかる書簡をグループ分けして分析することによって、ある程度の時間的な変遷をトレースすることが可能である。

3.4. 手法

今回分析の対象とした書簡類を時系列ごとに並べ、次の情報を取り出して人物ごとに順番に表にまとめた。それらは、日付、姓名、情報特性、トピック、関係、文脈、所在、職業、備考の9項目である。

「日付」は、書簡の右上に記載された作成日または投函日である。記載されていないものは少ないが、西暦年が不明なものは不明のままにしてある。

「姓名」は、まず書簡の書き手や受取人にかかわる人物名である⁽⁶⁾。他に、メッセージがある人物から別の人物に伝達されることが明確な場合にも書簡に登場する人物の名を記録した。しかしどちらもファミリーネームしか記載していない場合が圧倒的に多く、特定の個人の同定に結びつかなかったものも多い。また役職名や「あるドイツ人の友人」などとされて名前の記載がないケースも少なくない。またアイヌ名称については日本名以外のアイヌ語表記や単に「ekashi」や「私の先生」などの表記も多い。書簡とマンローの著書『Creed and Cult』との対比で、人物の特定が可能になるケースもいくつかあった。

「情報特性」は情報の伝達の経路特性を示すための概念であり、ネットワークがどのようにノード（「行為者」）間の関係を形成していくかを表すものである。ある情報がマンローから特定の個人に渡るとき（あるいはその逆に特定の個人からマンローに渡るとき）に、直接なのか、第3者を通

じてなのか、それとも第3者が別の個人から獲得した情報をさらに転送するのかに基づいて区分している。

「トピック」は手紙のなかで触れている話題を少数のキーワードで表現したものであるが、今回の社会ネットワーク分析には直接関係していない。

また、「関係」はあくまでもマンローが表記しているマンローとの関係をそのまま抽出したものであり、主観的なものである。したがって、ある書簡では「親しい友人」とあっても別の書簡では同じ個人のことを「優秀な先生」と表記することもあるが、それをそのまま踏襲している。

「文脈」はマンローがその人物を好意的、中立的、批判的に述べているかで区分した。

「所在」はその人物の主な活動の中心地であるが、不明な場合も多かった。マンローの住家を訪れるなど移動した場合にもその人物が本来活動している土地を選択した。

「職業」は、その人物の勤務先や肩書きを、マンロー書簡の記述にしたがって記録した。しかし明確に記載されていないことも多く、その場合は類推できるものやその後の調査で判明したものについてのみ記載した。

「備考」は上記の各項目以外で特に必要だと判断されることがあれば記載した。

これらの項目をもとにマンローと書簡に登場する人物との間の情報の流れと方向性がわかる部分を取り上げ、それらの流れを Ego Networks 分析用の隣接行列（「ソシオマトリクス」）に変換し、SNAの専用分析ソフトウェア Ucinet 6 を使って D ファイルに書き換えた上で、グラフ描画ソフト NetDraw で社会ネットワーク用のグラフを作成するとともに中心性の分析をおこなった。Ego Networks は社会ネットワーク分析の分析手法の1つであり、中心人物と中心人物が直接結びついている人物（ノード, nodes）、およびその紐帯（ties）から構成されるネットワークである。マンローが各人に投函した書簡が圧倒的に多いことを考慮し、マンローが中心人物となるネットワークが適切であると判断される。エゴネットワークの特徴としては次の2点が指摘されている⁽⁸⁾。

- 1) 人は、社会階層、年齢、性別、人種、政治思想などの基本的な属性が自己と類似している人と最も強い関係を築く。
- 2) ネットワーク内の多様性が高まれば、ネットワーク内にエゴが必要とする何かを提供する人物がいる確率が高まる。

④……………社会ネットワークグラフとネットワーク密度

前期（1908年代～1929年）と後期（1931年～1940年）の社会ネットワークを抽出したグラフを提示する（グラフ1、グラフ2）。これらのグラフの人物名については、ファミリーネームしか表記されていない者、今となってはアイヌ語名称がはっきりしない者、日本語の漢字表記がわからない者が含まれているため、マンローのオリジナル表記を尊重してアルファベットで書き表している。グラフ上の略記のIUは帝国大学の略で、President of IUは北海道帝国大学総長（当時の総長は南鷹次郎）を指す。また、Kokogaku kenkyu kwai（Kokogaku KK）は、マンローと交流のあった釧路考古学研究会のことである。

前期のネットワークグラフ (グラフ1)

前期のネットワークの分析により、NMSの19通の書簡に依拠した23人の登場人物からなるネットワークが出現した。第3者を経由しないと直接マンローにつながらない人物は存在しなかった。それでもハブ的な役割を担っている人物が数人見つかった。それはDobbie, J. J., Clarke, E., Vallance, D. J., Curle, A. などである。Clarke, E. がどのような人物かは不明だが、それ以外のDobbie, Vallance, Curleなどの人物はすべて王立スコットランド博物館 (Royal Scottish Museum: NMSの前身)の学芸員や館長を務めた人物である。それらの人物とマンローとの深いつながりを感じさせる。前期のネットワークは現地特派員として、王立スコットランド博物館に日本から考古民族資料の他、像、ガラス器や陶器など古美術品を多数送った。旧知の友人を介してそれらの資料はさらにダブリンの博物館にも送られた。注目したいのは母親 (Munro, Margaret) を通じてマンローのコレクションが王立スコットランド博物館に寄贈されていることである。母親が館職員と交友があったことは知られていたが [Wilkinson 2002:59], このネットワークもそれを示唆している。このネットワークグラフはコレクション形成史の解明にも重要な手がかりを与える。Seligman, C. G. は、ピット・リヴァース博物館に対するアフリカ民族資料のドナーとしても知られるが、マンローのアイヌ資料もセリグマン夫妻を経由して実際にピット・リヴァース博物館に寄贈されている。19世紀から20世紀初頭にかけて欧米の人類学者らが植民地からかき集めた資料群が故国の博物館の主要なコレクションを形成しているが、セリグマンによるマンローが集めたアイヌ資料の収集もそうした行為に連なる動きとみなすことができる。

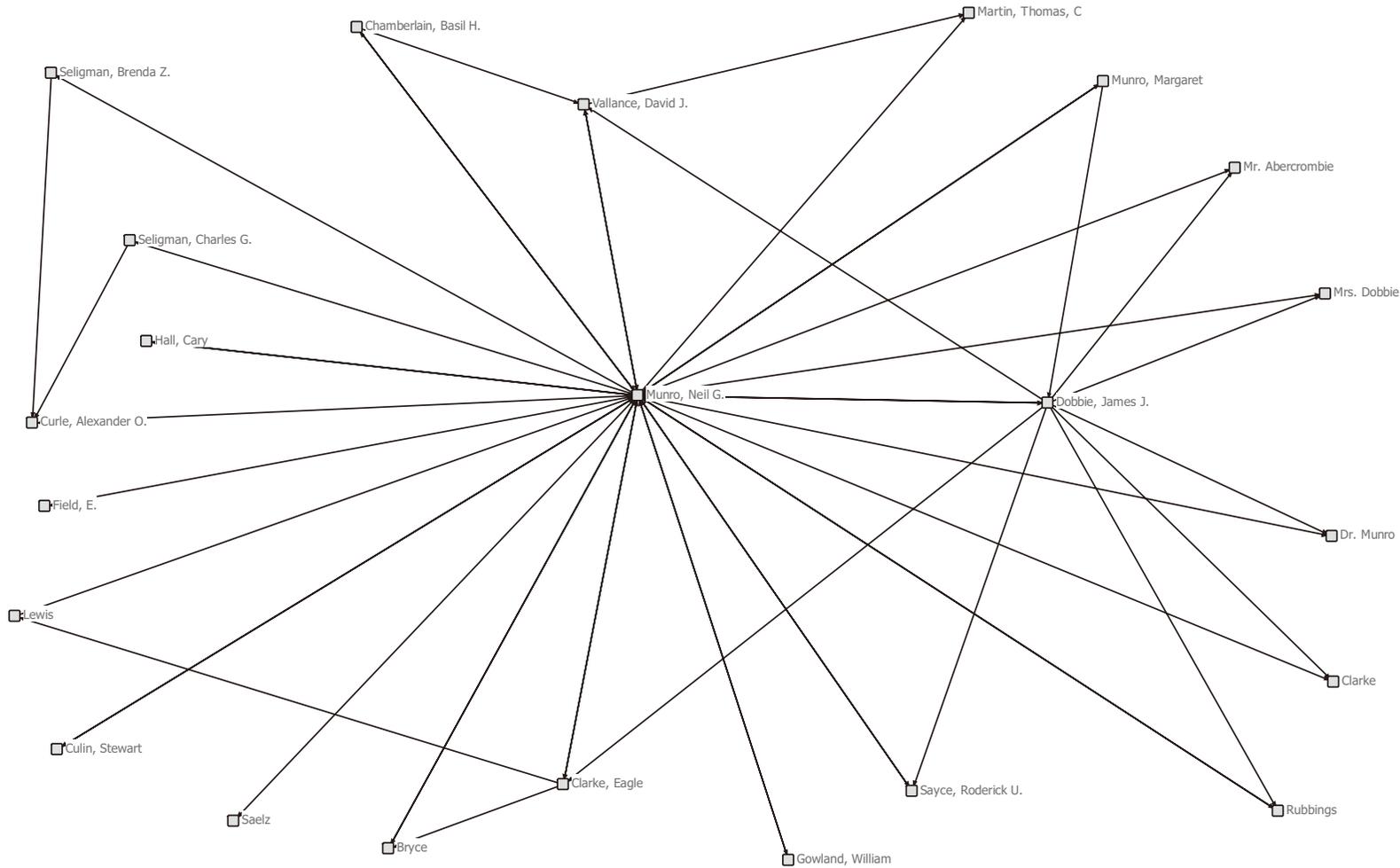
博物館の資料収集に協力したばかりでなく、ロンドン古物協会 (Soc. of Antiq. of London) にも自説の正しさを証明するために日本から30の標本を送っている (NMS: MUNSUP1.10)。

日本の先史文化や発掘の関連では、日本滞在中のGowland, W., Chamberlain, B. H., Sayce, R. U.らと行動をともしている他、ブルックリン美術館の職員でCullin, S.とも東洋文物のコレクション収集の件で実際に資料を見てもらっていることがわかる (NMS: MUNSUP1.10)。興味深いのは交友が深く1913年の死後、遺言によってマンローがその遺産の一部を譲り受けたBaelz (『ベルツの日記』で著名なエルウィン・フォン・ベルツ) は、後期のネットワークに現れるが、接触の機会が多かったはずの前期には登場しないことである。これはおそらく現存している書簡のバイアスによるものだろう。

前期と後期双方のネットワークに登場する人物もいた。それはSeligman夫妻のみであった。前期と後期のネットワークの断絶を示している。これは、やはり活動の場所やマンローの研究上の関心が大幅に変化したことを示唆する内容である。

後期のネットワークグラフ (グラフ2)

RAIとNMSの67通の書簡に依拠した65人からなる大型のネットワークである。マンローの書簡を中心にグラフを描いたので当然ではあるが、特定のハブの人物が消えるとマンローとの関係が途絶えてしまう遠距離の人物は、Seligman, C. G. が媒介したSansom, G. B. やCohen, M. とTusu Woman (実名は明かされていないが、病気の診断をおこなうアイヌ女性) のみでそれほど多くはなかった。このことは一般にネットワーク密度が高いことを表すものとされる。ネットワーク密度



グラフ1 前期(1908-1929年)社会ネットワークグラフ

23人の人物からなるネットワークであり、マンロー以外はすべて非日本国籍者である。矢印の向きにそって情報が流れている。紐帯の長さに意味はない。4本以上の紐帯を持つハブの存在を3つ指摘できる。それらは、Munro N. G., Dobbie, J. J., Vallance, D. J. の3人であり、ネットワーク内の中心的な役割を果たしていたと考えることができる。DobbieとVallanceは王立スコットランド博物館の関係者であった。マンローは全ての人々と直接つながっている。これは情報の伝達特性の観点から必ずしも効率的なネットワークとは言えない。特定の人物の仲介を経ずに接触できる人物がないことはネットワークの密度を上げてしまい、重複や無駄が発生しやすいためである。こうしたネットワークでは共通の目的にそった行動がおこなわれる。例えば、日本の文化財を送ったり、先史文化研究の議論を進展させる上で連携が保たれていた。実際にSayce, R. U. は来日してマンローと横浜で発掘を行っている。

は実際に存在する関係（紐帯）数を理論的な関係の最大数で除して導かれる数値で、1が最大値となる。ネットワーク内の人々が互いに有している関係がどのくらい緊密であるかを表す指標であり、前期は46の紐帯が存在し、その数値は0.0998と非常に高密度であるが、後期は154の紐帯数で密度は0.0370と低く、その差は歴然としている。

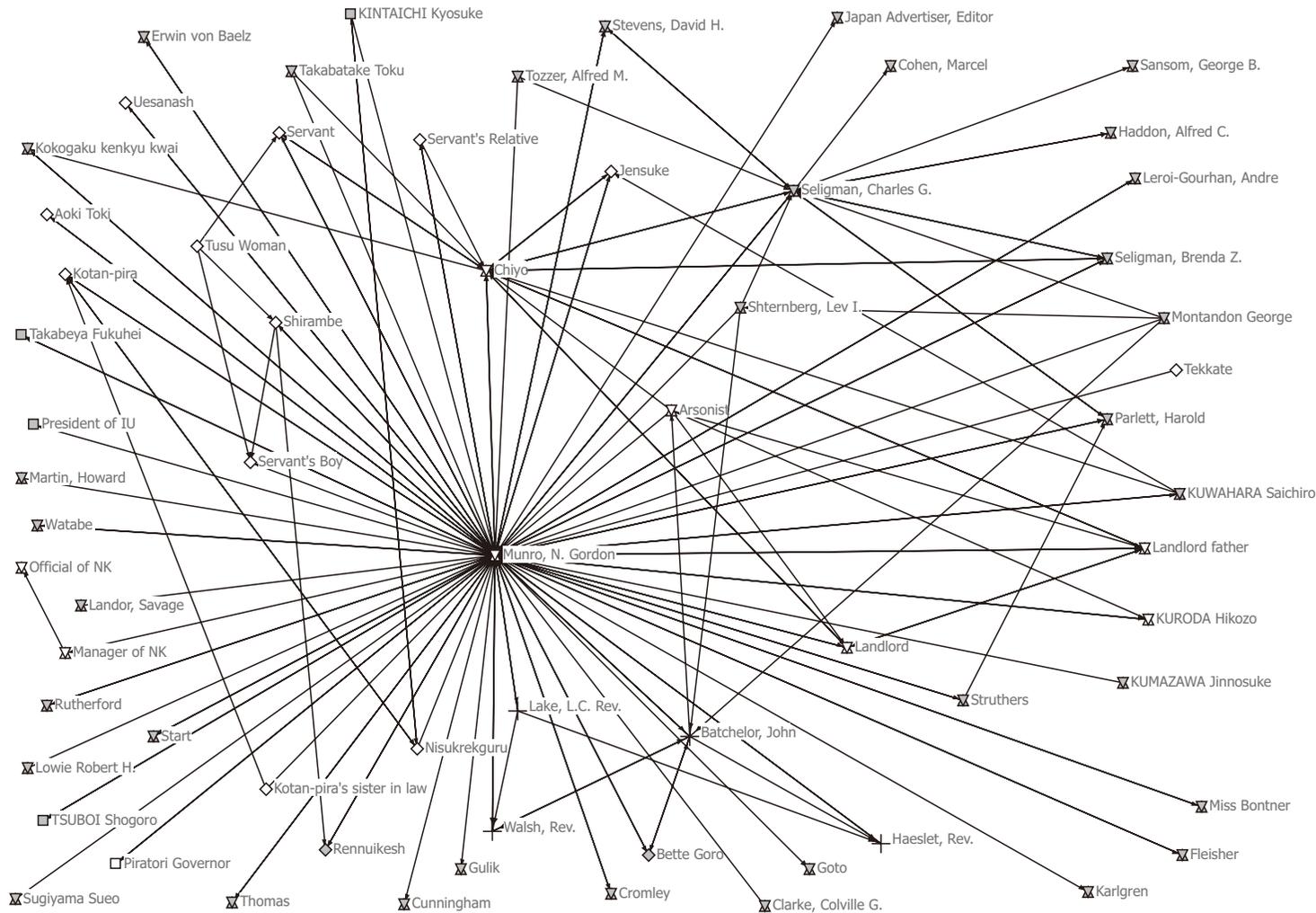
密度が高いネットワーク内では直接的な関係が人々を相互に結びつけているために、そのネットワークに所属している人々は非常に均一な価値観を保ち、類似した行動をとりがちであるのに対し、密度の低いネットワーク内では価値や規範に多様性が存在し、その行動も多様になるという一般的な特性がある〔安田 1997：77〕。現存する書簡だけでネットワーク関係が存在しなかったことを証明することはできないが、前期のネットワークに属する人々は外国人研究者のみで日本人は一人も登場せず、後期のネットワークと著しい対照をなしている。王立スコットランド博物館職員も多く、コレクションの授受が主要なトピックであり、先史時代に関する共通の研究課題を軸に意見の交換なども見られる。

後期は二風谷を中心に活動し、関心も狭い地域のアイヌ文化に集中する時期ではあるが、逆に横浜・軽井沢に活動の拠点を置き外国にも立ち寄っていた前期よりネットワーク密度が低いのは意外であった。こうしたネットワークの特性は、職業・社会階層・年齢・性別といった社会属性のかなり異なる人々との関係が多数あることを示しており、雇用、出世や昇進などのチャンスが高まるとされる。マンローの研究資金が複数の団体から拠出されており、研究がほぼそとながらも続けられていたのはこうしたマンローの交友関係の在り方に規定されているのかもしれない。

後期は、時間的にはやや短いマンローの広範な交友を反映していて、外国人、日本人、研究者、一般人、友人、アイヌ、村人、家族、聖職者、外交官、行政官など多種多様な顔ぶれがそろっている。二風谷に滞在する期間が長いため、基本的な外部との接点を書簡に依存する割合は前期よりもはるかに大きかったと推察できる。また、話題や行動パターンも少数のものに限定されない。資料の性格から人物間の関係はすべて表現されているわけではないが、それでも後期に登場するすべての人間がマンローとマンツーマンの関係に限定されていないのは注目されていいであろう。特定の人物をマンローに仲介するハブ的な役割を果たす人物が見られる。そのような人物にはセリグマンやバチェラー (Batchelor, J.), チヨ (Chiyo)⁽¹⁰⁾ がいる。セリグマンとチヨは出次数に比して入次数が多く、バチェラーは出次数も多い。これはバチェラーの旺盛な行動力によるものと考えられ、マンローの書簡のなかに明らかにバチェラーを意識したものが多いことと相まって、マンロー後期におけるバチェラーの存在感の高さを印象づける。

4.2. クリーク

前期マンローと後期マンローのネットワーク内でクリークがいくつ存在するかを同定した。クリークとはネットワーク内の構成要素（ノード）同士が直接結合関係にあるサブグループのまとまりを指し、少なくとも一定期間同じような目的を共有したり、連携を維持する集団と考えられている。ネットワーク内において相互に強い直接的利害関係を持つ登場人物の集合である。前期マンローでは3人以上のノードを含むクリークは抽出できなかった。一方後期では3人以上の人物から形成されるクリークが8件見つかった。それらは以下の通りである。



グラフ2 後期(1931-1940年)社会ネットワークグラフ

67通の書簡に依拠した65人からなる大型のネットワークである。非日本国籍者、日本人、研究者、一般人、友人、アイヌ、村人、家族、聖職者、外交官、行政官など多種多様な人物から構成されており、情報の授受はコミュニティ内部に限定されない。紐帯の長さに意味はない。図を理解しやすくするために、二風谷周辺で生活する人物を白抜きで、それ以外の人物を着色して表している。また、アイヌはダイヤモンドで、自治体首長と公務員は四角で、聖職者は十字で表現している。4本以上の紐帯を持つハブの存在は、Chiyo, Seligman, C. G., Batchelor, J., Landlord (大家), Landlord father (大家の父親), Montandon, G., Shternberg, Lev I. の6人である。

アイヌのお手伝いさんの息子の病気が Renuikesh のイケマ像作りにあるという Tusu Woman (アイヌの呪術師) の判断を Shirambe は受け入れる。それ以外では村のアイヌと Renuikesh の接点はない。マンローが Renuikesh をコミュニティの外から聞き取りのために招き入れているために孤立している状況を示すものと考えられる。

- 1: Chiyo, Landlord Father, Landlord, Munro N. G.
- 2: Jensuke, Chiyo., Munro N. G.
- 3: Chiyo., Munro N. G., Seligman, B. Z., Seligman, C. G.
- 4: Chiyo., Munro, N. G., Servant
- 5: Batchelor, J., Bette, G., Munro, N. G.
- 6: Batchelor, J., Munro, N. G., Walsh
- 7: Munro, N. G., Parlett, H., Seligman, C. G.
- 8: Munro, N. G., Seligman C. G., Stevens, D. H.

マンローがすべてのクリークに登場するのは当然としても、Chiyo（チヨ）が4回、Seligman, C. G.（セリグマン夫）が3回、Batchelor, J.（バチェラー）が2回と、複数のクリークの構成メンバーを兼ねていることが注目される。これらの人物以外に複数のクリークにまたがって登場する人物はいない。チヨとセリグマンはマンローの活動を実質的に支えた人物として理解できる。これに対しバチェラーは、アイヌに対する考え方の違いなどあって、当時の新聞でもマンローとの対立がたびたび報道されていたにもかかわらず、クリークを2つ形成しているのは意外である。マンローにとってバチェラーの存在は無視できないほどに大きなものだったことを物語っている。いずれにしろクリークの存在から、それを構成する人物と共有した強い関心事を推測することが可能である。今後RAI・NMS書簡の内容を吟味することによってより多くの事実を解明できるだろうが、現状では次のようなトピックが各クリークと結びつくと考えられる。

1のクリークは、Landlord（大家）とその父親、マンロー、チヨからなる。火事以降の大家とマンローの反目については、様々な機会に表面化しており、晩年のマンローを大いに悩ませる。2はマンローの助手を努めたアイヌ青年 Jensuke（貝澤善助）とマンロー、チヨの組み合わせで、アイヌ研究の実質的な遂行にかかわっている。3はマンロー夫妻とセリグマン夫妻の交流を示す。来日してマンローにアイヌ研究を勧めたセリグマンは、マンローのアイヌ研究に関する著書の作成で助言しており、イングランドと日本の間で文通が続く。1936年11月7日付けのセリグマン宛の手紙（RAI:MS249/5/29）によれば、マンローはセリグマン夫人にクマと子グマの木彫品を贈っている。4のクリークは、実生活を支える上で大きな貢献を果たしたマンロー家のお手伝いを務めたアイヌ女性（Servant）とマンロー夫妻からなるクリークであるが、その女性の名前は不詳である。5の Bette Goro はマンローの表記をそのまま踏襲しているが、バチェラーの弟子の辺泥五郎のことであり、マンローの二風谷移住の際にその案内役を務めて以来交流があった。6の Walsh（ウォルシュ）とバチェラーは札幌在住の聖公会の宣教師で、マンローと札幌や二風谷で会見するなど交流があった。7の Parlett（パレット）はマンローの友人であり、セリグマンと同様、マンローの著書の刊行に向けて協力する役割を果たした。8の Stevens（スティーブンス）はニューヨークのロックフェラー財団の研究費交付の担当者であり、マンローとも文通をおこなった。その資金援助をめぐってセリグマンとも関わりがあった。

4.3. ネットワークの中心性

次にネットワークにおける階層構造をモデル化するための中心性分析の結果を前期と後期のネッ

トワークそれぞれで示す（表1，表2）。分析値は中心性を導き出す5種類の代表的なモデル〔次数中心性（Degree Centrality）、近接中心性（Closeness Centrality）、媒介中心性（Betweenness Centrality）、固有ベクトル中心性（Eigenvector Centrality）、アクターインフォメーション中心性（Actor-information Centrality）〕を使用している。数値が高いほど高い中心性を占めており、各モデル内での相対的な位置を表している。それぞれの中心性を算出するモデルには利点と欠点があるので、それを組み合わせて使用する。

中心性は中心概念に基づいて中心の度合いを尺度化したものであり、中心は「権力」との関連が強いために、その分析は現実の政治、経済の様々な組織研究に応用されるなどきわめて実践志向が強い研究分野となっており、研究の蓄積もある〔金光 2003：135〕。ネットワークの中心人物であるということは、最もパワーを持っているということと同義であり、他者の行為に影響を及ぼす「統制」能力にも長けているとされる〔安田 1997：87〕。マンローの社会関係に即すならば、マンローが自分以外のそうした人物とどのようにつながって（利用できて、あるいは利用されて）いるかどうかということがマンローの意図を実現する上で重要なポイントとなる。

次数中心性はノードの持つ紐帯の数で中心性をはかるオーソドックスな指標である。出次数が多ければそのグループのなかで最も多くの人を信頼している人物の中心性が高くなり、入次数が多ければグループ内で最も多くの人に信頼されている人物の中心性が高くなる。

近接中心性は、あるノードがグループ内の他のすべてのノードに対し、経由しなければならない紐帯の数の点でどの程度近縁なのかを算出する指標である〔Mizoguchi 2009：20〕。あるノードの中心性の度合いは、ネットワーク内の他のノードに比べて、相対的に接近しやすいほど増加する。そして、他のノードに到達するための紐帯数が多くなれば多くなるほど、そのノードの中心性の度合いは低下する。

媒介中心性は、ネットワーク内の仲介者（ブローカー）のような存在を想定し、そのような人物を介在させなければ情報が伝達されないような「キー」となる人物がいた場合に最も中心性が高くなる指標である。あるノードが他のノードの情報の流れをどれだけコントロールできているかという指標でもある〔増田 2007：195〕。ある重要な情報が特定の人物を経由してネットワークの外側からもたらされるような場合、その人物の存在なしにはその情報が遮断されてしまうことになる。マンローが外国の研究者から昭和初期の二風谷の医療水準を劇的に改善するような医学知識を導入して治療にあたるようなケースを想定すると、マンローがネットワークから消え去ってしまうと、そのネットワークは外国の研究者との唯一の接点を失ってしまうために、他の人物はせっかくの医療情報に直接接することができなくなる。このように関係や情報を「仲介」できる特殊な位置を占めるマンローのような人物がいた場合に、ネットワーク内における中心性が高く算定される。

固有ベクトル中心性は、因子分析を用いて個々のノードの固有ベクトルを計算し、ネットワーク内の全体的（global）または総合的（overall）な構造の観点から、他のすべてのノードとの距離が最短になるようなノードを最も中心的なノードと見なし、それを探し出す手法である〔Hanneman and Riddle 2005〕。次数中心性の欠点は、人々から関係の対象とされ関わりを求められている人との関係と、他人があまり重要視せずネットワーク内で関わりを求められていない人との関係を同等に扱っていることにある〔安田 2001：87〕。その短所を克服するために中心性の高い人と低い人が

点在するときに、中心性の低い人よりも高い人との紐帯を重視して連結している相手の中心性を高くする考え方が投影されている。

アクターインフォメーション中心性は、あるノードが別のノードと何ステップの紐帯数でつながっているかを表すパス長 (path length) と固有ベクトルなどの数値 (eigenmeasures) を組み合わせた測定方法であり、この中心性が高いノードは、一般的にネットワーク内の情報の流れをコントロールする力が強いとされる。情報は必ずしも任意の2地点間の最短距離を通るわけではないので、最短距離上に位置するノードを同等に扱うことよりも情報の授受能力の高さを評価しようとする考え方に拠っている。

4.4. 中心性のスコア

中心性の高得点人物を見てみると、前期ではトップ3位まではどのモデルの分析値も同じで、安定的な結果を示している。特にマンローの友人で王立スコットランド博物館の館長を努めた Dobbie, J. J. の各指標の中心性は傑出しており、ネットワークグラフ (グラフ1) を見てもその位置づけは理解できる。出次数の8、入次数の2をあわせた10本の紐帯数はマンローに次ぐ第2位の地位を占め、他を大きく引き離している。

Mrs. Dobbie については、固有ベクトル中心性だけが、彼女を5位にランクし、逆に他のモデルがいずれも5位と高く評価している Curle, A. O. を11位とかなり低めにランクしている。

後期のネットワークでは、各モデル手法ごとに前期よりも変動の幅が大きくなる傾向がある。すべての分析値で10位以内に入った人物は、マンロー以外では、Chiyō, Seligman, C. G., Batchelor, J., 放火犯 (グラフ・表では「Arsonist」と表記) の4人しかいない。

同様にすべての分析値で20位以内に入った人物は、上記4人以外には、Montandon, G., Shternberg, L. I., Haeslet, Walsh, Parlett, H., Servant, Shirambe の7人のみである。Montandon, G., Shternberg, Lev I. はマンローのアイヌ研究に影響を与えた研究者であり、Haeslet と Walsh は日本聖公会のそれぞれ東京教区と北海道教区の主教であると思われ、Parlett はマンローの元患者で友人でもあり、マンローがアイヌ研究の出版で頼みとしていた人物である。この7人のなかでアイヌは、マンローが信頼を寄せたインフォーマントであった Shirambe とマンロー邸のお手伝い (Servant) を努めた人物の2人である。

Seligman, B. Z. は夫とともにマンローの研究を支援した人物ではあるが、他のモデル手法では11位以内に位置しているにもかかわらず、媒介中心性のスコアは19位と極端に低い。同様な傾向を示すものとして、マンローの移住時の借家の大家だった人物とその父親、アイヌ助手の Jensuke、釧路の考古学協会理事でマンローと親交のあった Kuwahara, S. (桑原佐市郎) がいる。それらの人物はいずれも、もし媒介中心性が高ければ、すべての指標で全員17位以内にランクされるネットワーク内の重要人物となっていた。逆に日東鉱山の責任者 (Manager) は他の中心性モデルよりも媒介中心性モデルで圧倒的に高く評価されている。

特異な人物としては、すべての中心性で9位以内にランクされた放火犯の存在があげられる。マンローはセリグマン宛の手紙のなかで「火事の前の午後、散歩に出ようとして、大家さんの家と我が家の通用口の間の隅をうろついている日本人男性と出くわした」と述べ、放火との関係を強く示

表1 5種の分析手法に基づいた前期社会の中心性順位

順位	人物	次数	順位	人物	近接	順位	人物	媒介	順位	人物	固有ベクトル	順位	人物	アクターイン フォメーション
1	Munro, Neil G.	100.000	1	Munro, Neil G.	100.000	1	Munro, Neil G.	85.000	1	Munro, Neil G.	85.979	1	Munro, Neil G.	1.656
2	Dobbie, James J.	42.857	2	Dobbie, James J.	63.636	2	Dobbie, James J.	6.667	2	Dobbie, James J.	52.795	2	Dobbie, James J.	1.428
3	Vallance, David J.	19.048	3	Vallance, David J.	55.263	3	Vallance, David J.	0.714	3	Vallance, David J.	32.033	3	Vallance, David J.	1.153
3	Clarke, Eagle	19.048	3	Clarke, Eagle	55.263	3	Clarke, Eagle	0.714	3	Clarke, Eagle	32.033	3	Clarke, Eagle	1.153
5	Curle, Alexander O.	14.286	5	Curle, Alexander O.	53.846	5	Curle, Alexander O.	0.238	5	Mrs. Dobbie	24.610	5	Curle, Alexander O.	0.987
6	Mrs. Dobbie	9.524	6	Mrs. Dobbie	52.500	6	Mrs. Dobbie	0.000	5	Rubbings	24.610	6	Mrs. Dobbie	0.944
6	Rubbings	9.524	6	Rubbings	52.500	6	Gowland, William	0.000	5	Munro, Margaret	24.610	6	Rubbings	0.944
6	Munro, Margaret	9.524	6	Munro, Margaret	52.500	6	Rubbings	0.000	5	Dr. Munro	24.610	6	Munro, Margaret	0.944
6	Dr. Munro	9.524	6	Dr. Munro	52.500	6	Munro, Margaret	0.000	5	Mr. Abercrombie	24.610	6	Dr. Munro	0.944
6	Mr. Abercrombie	9.524	6	Mr. Abercrombie	52.500	6	Dr. Munro	0.000	5	Sayce, Roderick U.	24.610	6	Mr. Abercrombie	0.944
6	Sayce, Roderick U.	9.524	6	Sayce, Roderick U.	52.500	6	Mr. Abercrombie	0.000	11	Curle, Alexander O.	22.042	6	Sayce, Roderick U.	0.944
6	Bryce	9.524	6	Bryce	52.500	6	Saelz	0.000	12	Bryce	20.928	12	Bryce	0.908
6	Lewis	9.524	6	Lewis	52.500	6	Sayce, Roderick U.	0.000	12	Lewis	20.928	12	Lewis	0.908
6	Chamberlain, Basil H.	9.524	6	Chamberlain, Basil H.	52.500	6	Bryce	0.000	12	Chamberlain, Basil H.	20.928	12	Chamberlain, Basil H.	0.908
6	Martin, Thomas, C.	9.524	6	Martin, Thomas, C.	52.500	6	Lewis	0.000	12	Martin, Thomas, C.	20.928	12	Martin, Thomas, C.	0.908
6	Seligman, Charles G.	9.524	6	Seligman, Charles G.	52.500	6	Culin, Stewart	0.000	16	Seligman, Charles G.	19.156	16	Seligman, Charles G.	0.879
6	Seligman, Brenda Z.	9.524	6	Seligman, Brenda Z.	52.500	6	Chamberlain, Basil H.	0.000	16	Seligman, Brenda Z.	19.156	16	Seligman, Brenda Z.	0.879
18	Gowland, William	4.762	18	Gowland, William	51.220	6	Field, E.	0.000	18	Gowland, William	15.247	18	Gowland, William	0.661
18	Saelz	4.762	18	Saelz	51.220	6	Martin, Thomas, C.	0.000	18	Saelz	15.247	18	Saelz	0.661
18	Culin, Stewart	4.762	18	Culin, Stewart	51.220	6	Hall, Cary	0.000	18	Culin, Stewart	15.247	18	Culin, Stewart	0.661
18	Field, E.	4.762	18	Field, E.	51.220	6	Seligman, Charles G.	0.000	18	Field, E.	15.247	18	Field, E.	0.661
18	Hall, Cary	4.762	18	Hall, Cary	51.220	6	Seligman, Brenda Z.	0.000	18	Hall, Cary	15.247	18	Hall, Cary	0.661

中心性を評価する5手法によってネットワークを構成している人物ごとに中心度を求めたものであり、点数の高い人物の中心度が高い。次数・近接・媒介・固有ベクトル・アクターインフォメーション中心性で中心度を算出している。それは次の5つの基準に基づいている。1) ノードの持つ紐帯の数, 2) ノード間の距離, 3) ノードの持つ媒介能力, 4) 重要人物との結びつき, 5) 情報量の多寡。なお、アクターインフォメーション中心性以外はデータを標準化している。

各手法によるスコアの変動は少ない。多くの次数を集めているハブになるような人物の点数が高い。マンローと直接連結していない人物は存在していないため、媒介するメリットがあまり実感できない均質なネットワークの特徴を示す。

表2 5種の分析手法に基づいた後期社会の中心性順位

順位	人物	次数	順位	人物	近接	順位	人物	媒介	順位	人物	固有ベクトル	順位	人物	アクターイン フォメーション
1	Munro, N. G.	92.188	1	Munro, N. G.	92.754	1	Munro, N. G.	93.068	1	Munro, N. G.	90.925	1	Munro, N. G.	1.364
2	Chiyo	18.750	2	Chiyo	54.701	2	Seligman, C. G.	9.697	2	Chiyo	32.761	2	Chiyo	1.193
3	Seligman, C. G.	17.188	3	Seligman, C. G.	53.782	3	Manager of NK	3.125	3	Seligman, C. G.	26.237	3	Seligman, C. G.	1.143
4	Batchelor, John	10.938	4	Batchelor, John	50.794	4	Chiyo	2.071	4	Arsonist	22.653	4	Batchelor, John	1.094
5	Arsonist	9.375	4	Montandon, Geroge	50.794	5	Servant	1.133	5	Batchelor, John	22.087	5	Arsonist	1.069
6	Landlord Fa.	6.250	4	Shternberg, Lev I.	50.794	6	Shirambe	0.996	6	Landlord Fa.	19.026	6	Montandon George	0.986
6	Landlord	6.250	7	Arsonist	50.394	7	Servant's Boy	0.922	6	Landlord	19.026	6	Shternberg, Lev I.	0.986
6	Montandon George	6.250	7	Parlett, Harold	50.394	8	Batchelor, John	0.339	8	Montandon George	18.104	8	Landlord Fa.	0.980
6	Shirambe	6.250	7	Seligman, B. Z.	50.394	9	Arsonist	0.174	8	Shternberg, Lev I.	18.104	8	Landlord	0.980
6	Shternberg, Lev I.	6.250	10	Shirambe	50.000	10	Parlett, Harold	0.099	10	Seligman, B. Z.	17.249	10	Seligman, B. Z.	0.932
11	Haeslet	4.688	10	Stevens, D. H.	50.000	11	Montandon George	0.066	11	Jensuke	16.081	11	Jensuke	0.901
11	Jensuke	4.688	10	Tozzer, A. M.	50.000	11	Shternberg, Lev I.	0.066	11	Kuwahara Saichiro	16.081	11	Kuwahara Saichiro	0.901
11	Kotan-pira	4.688	13	Landlord Fa.	49.612	13	Tusu Woman	0.050	13	Parlett, Harold	14.880	13	Shirambe	0.900
11	Kuwahara Saichiro	4.688	13	Landlord	49.612	14	Kotan-pira	0.025	14	Servant	14.776	14	Servant	0.898
11	Lake, L. C.	4.688	13	Servant	49.612	14	Nisukreguru	0.025	15	Haeslet	14.592	15	Haeslet	0.892
11	Nisukreguru	4.688	13	Servant's Boy	49.612	16	Haeslet	0.017	15	Walsh	14.592	15	Walsh	0.892
11	Parlett, Harold	4.688	17	Haeslet	49.231	16	Lake, L. C.	0.017	17	Kokogaku KK	14.230	17	Parlett, Harold	0.888
11	Seligman, B. Z.	4.688	17	Jensuke	49.231	16	Walsh	0.017	17	Servant's Relative	14.230	18	Lake, L. C.	0.871
11	Servant	4.688	17	Kotan-pira	49.231	19	Bette Goro	0.000	17	Takabatake Toku	14.230	19	Kotan-pira	0.848
11	Servant's Boy	4.688	17	Kuwahara Saichiro	49.231	19	Miss Bontner	0.000	20	Shirambe	13.843	19	Nisukreguru	0.848
11	Tusu Woman	4.688	17	Lake, L. C.	49.231	19	Clarke, C. G.	0.000	21	Lake, L. C.	13.819	21	Servant's Boy	0.840
11	Walsh	4.688	17	Nisukreguru	49.231	19	Cohen, Marcel	0.000	22	Stevens, D. H.	13.480	22	Kokogaku KK	0.810
23	Bette Goro	3.125	17	Manager of NK	49.231	19	Cromley	0.000	22	Tozzer, A. M.	13.480	22	Servant's Relative	0.810
23	Kintaichi Kyosuke	3.125	17	Rennuikesh	49.231	19	Cunningham	0.000	24	Kotan-pira	13.382	22	Takabatake Toku	0.810
23	Kokogaku KK	3.125	17	Walsh	49.231	19	Fleisher	0.000	24	Nisukreguru	13.382	25	Stevens, D. H.	0.806
23	Kotan-pira, S-i-L	3.125	26	Bette Goro	48.855	19	Goto	0.000	26	Kuroda Hikozo	13.068	25	Tozzer, A. M.	0.806
23	Kuroda Hikozo	3.125	26	Kintaichi Kyosuke	48.855	19	Gulik	0.000	27	Bette Goro	13.002	27	Tusu Woman	0.798
23	Manager of NK	3.125	26	Kokogaku KK	48.855	19	Piratori Governor	0.000	28	Servant's Boy	12.600	28	Bette Goro	0.797
23	Rennuikesh	3.125	26	Kotan-pira, S-i-L	48.855	19	Haddon, A. C.	0.000	29	Struthers	12.173	29	Kuroda Hikozo	0.794
23	Servant's Relative	3.125	26	Kuroda Hikozo	48.855	19	Japan Adver. Edi.	0.000	30	Rennuikesh	12.054	30	Rennuikesh	0.768
23	Stevens, D. H.	3.125	26	Servant's Relative	48.855	19	Jensuke	0.000	31	Kintaichi Kyosuke	12.001	31	Struthers	0.765
23	Struthers	3.125	26	Struthers	48.855	19	Karlgren	0.000	31	Kotan-pira, S-i-L	12.001	32	Kintaichi Kyosuke	0.757
23	Takabatake Toku	3.125	26	Takabatake Toku	48.855	19	Kintaichi Kyosuke	0.000	33	Manager of NK	10.602	32	Kotan-pira, S-i-L	0.757
23	Tozzer, A. M.	3.125	34	Miss Bontner	48.485	19	Kokogaku KK	0.000	34	Miss Bontner	10.461	34	Manager of NK	0.598

35	Miss Bontner	1.563	34	Clarke, C. G.	48.485	19	Kotan-pira, S-i-L	0.000	34	Clarke, C. G.	10.461	35	Miss Bontner	0.587
35	Clarke, C. G.	1.563	34	Cromley	48.485	19	Kumazawa Jinnosuke	0.000	34	Cromley	10.461	35	Clarke, C. G.	0.587
35	Cohen, Marcel	1.563	34	Cunningham	48.485	19	Kuroda Hikocho	0.000	34	Cunningham	10.461	35	Cromley	0.587
35	Cromley	1.563	34	Fleisher	48.485	19	Kuwahara Saichiro	0.000	34	Fleisher	10.461	35	Cunningham	0.587
35	Cunningham	1.563	34	Goto	48.485	19	Landlord Fa.	0.000	34	Goto	10.461	35	Fleisher	0.587
35	Fleisher	1.563	34	Gulik	48.485	19	Landlord	0.000	34	Gulik	10.461	35	Goto	0.587
35	Goto	1.563	34	Piratori Governor	48.485	19	Landor, Savage	0.000	34	Piratori Governor	10.461	35	Gulik	0.587
35	Gulik	1.563	34	Japan Adver. Edi.	48.485	19	Leroi-Gourhan, Andre	0.000	34	Japan Adver. Edi.	10.461	35	Piratori Governor	0.587
35	Piratori Governor	1.563	34	Karlgren	48.485	19	Lowie, R. H.	0.000	34	Karlgren	10.461	35	Japan Adver. Edi.	0.587
35	Haddon, A. C.	1.563	34	Kumazawa Jinnosuke	48.485	19	Martin, Howard	0.000	34	Kumazawa Jinnosuke	10.461	35	Karlgren	0.587
35	Japan Adver. Edi.	1.563	34	Landor, Savage	48.485	19	President of IU	0.000	34	Landor, Savage	10.461	35	Kumazawa Jinnosuke	0.587
35	Karlgren	1.563	34	Leroi-Gourhan, Andre	48.485	19	Official of NK	0.000	34	Leroi-Gourhan, Andre	10.461	35	Landor, Savage	0.587
35	Kumazawa Jinnosuke	1.563	34	Lowie, R. H.	48.485	19	Rennuikesh	0.000	34	Lowie, R. H.	10.461	35	Leroi-Gourhan, Andre	0.587
35	Landor, Savage	1.563	34	Martin, Howard	48.485	19	Rutherford	0.000	34	Martin, Howard	10.461	35	Lowie, R.H.	0.587
35	Leroi-Gourhan, Andre	1.563	34	President of IU	48.485	19	Sansom, G. B.	0.000	34	President of IU	10.461	35	Martin, Howard	0.587
35	Lowie, R. H.	1.563	34	Rutherford	48.485	19	Seligman, B. Z.	0.000	34	Rutherford	10.461	35	President of IU	0.587
35	Martin, Howard	1.563	34	Aoki Toki	48.485	19	Aoki Toki	0.000	34	Aoki Toki	10.461	35	Rutherford	0.587
35	President of IU	1.563	34	Start	48.485	19	Servant's Relative	0.000	34	Start	10.461	35	Aoki Toki	0.587
35	Official of NK	1.563	34	Sugiyama Sueo	48.485	19	Start	0.000	34	Sugiyama Sueo	10.461	35	Start	0.587
35	Rutherford	1.563	34	Takabeya Fukuhei	48.485	19	Stevens, D. H.	0.000	34	Takabeya Fukuhei	10.461	35	Sugiyama Sueo	0.587
35	Sansom, G. B.	1.563	34	Tekkate	48.485	19	Struthers	0.000	34	Tekkate	10.461	35	Takabeya Fukuhei	0.587
35	Aoki Toki	1.563	34	Thomas	48.485	19	Sugiyama Sueo	0.000	34	Thomas	10.461	35	Tekkate	0.587
35	Start	1.563	34	Tsuboi Shogoro	48.485	19	Takabatake Toku	0.000	34	Tsuboi Shogoro	10.461	35	Thomas	0.587
35	Sugiyama Sueo	1.563	34	Uesanash	48.485	19	Takabeya Fukuhei	0.000	34	Uesanash	10.461	35	Tsuboi Shogoro	0.587
35	Takabeya Fukuhei	1.563	34	Erwin von Baelz	48.485	19	Tekkate	0.000	34	Erwin von Baelz	10.461	35	Uesanash	0.587
35	Tekkate	1.563	34	Watabe	48.485	19	Thomas	0.000	34	Watabe	10.461	35	Erwin von Baelz	0.587
35	Thomas	1.563	61	Cohen, Marcel	35.165	19	Tozzer, A. M.	0.000	61	Tusu Woman	4.742	35	Watabe	0.587
35	Tsuboi Shogoro	1.563	61	Haddon, A. C.	35.165	19	Tsuboi Shogoro	0.000	62	Cohen, Marcel	3.091	62	Cohen, Marcel	0.542
35	Uesanash	1.563	61	Sansom, G. B.	35.165	19	Uesanash	0.000	63	Haddon, A. C.	3.019	62	Haddon, A. C.	0.542
35	Erwin von Baelz	1.563	64	Tusu Woman	34.225	19	Erwin von Baelz	0.000	63	Sansom, G. B.	3.019	62	Sansom, G. B.	0.542
35	Watabe	1.563	65	Official of NK	33.161	19	Watabe	0.000	65	Official of NK	1.220	65	Official of NK	0.379

中心性を評価する5手法によってネットワークを構成している人物ごとに中心度を求めたものであり、点数の高い人物の中心度が高い。次数・近接・媒介・固有ベクトル・アクターインフォメーション中心性で中心度を算出している。それは次の5つの基準に基づいている。1) ノードの持つ紐帯の数、2) ノード間の距離、3) ノードの持つ媒介能力、4) 重要人物との結びつき、5) 情報量の多寡。なお、アクターインフォメーション中心性以外はデータを標準化している。

表1よりも各手法による変動が大きく、ネットワーク内の人物の多様性を示している。すべての分析値で10位以内に入った人物は、マンロー以外では、Chiyo, Seligman, C. G., Batchelor, J., Arsonist (放火犯)の4人がいる。一方、ユニークな役割を反映して、Jensuke (貝澤善助), Kuwahara, S. (桑原佐市郎), Manager of NK (日東鉱山の責任者), Tusu Woman (病気の診断をおこなうアイヌ女性)は手法による変動が多い人物である。マンローにアイヌ情報をもたらしたアイヌの古老では、Shirambe と Kotan-pira が高い順位にとどまる一方で、Rennuikesh と Uesanash が低い順位にとどまっていることに注意されたい。

唆している (RAI: MS249/5/6)。出次数が5, 入次数が1となっており, マンローのネットワーク内の6人の人物と接点があることがわかる。この人物はマンローのネットワークにおいて存在感が際だっている。1932年のマンローが商家から借りて仮住まいしていた住居の火災は放火・失火両方の可能性が指摘されており [出村編 2006], 類焼したM家倉庫の弁済責任を逃れるためにマンローはチヨとともに生涯放火説を主張しつづけたという [桑原 1983: 197]。にもかかわらず, 社会ネットワーク分析で表面化するのとは各方面にあてた手紙で釈明や強い調子で繰り返し非難をおこなった結果を反映しており, 現実には放火犯でなかった人物の可能性もあるが, それだけマンローが意識的にその犯行を強く匂わせようと努力したことのあらわれである。

媒介中心性の点で, 3番目に位置づけられている日東鉦山の責任者は注目に値する。他の指標では次数中心性で23位, 近接中心性で17位, 固有ベクトル中心性で33位, アクターインフォメーション中心性で34位であり, 決して普遍性のある中心性の高さを示しているわけではないものの予想外の結果であった。日東鉦山の鉦山技師が, マンローがスパイであるとの噂を流していたことを鶴川で知ったマンローは, その名は不明であるが日東鉦山の責任者宛に抗議の手紙を書いた (NMS: MUN1.18, RAI: MS249/5/40)。マンローの起伏の多い後半の人生を象徴しているといえる。

また, 興味深いのは, Batchelor 以外にも日本聖公会の聖職者などは, どのモデル手法の結果でも, ネットワーク内の中心性が相対的に高い傾向にある。これらには Haeslet, Lake, L. C., Walsh など, 東京や札幌の教区の主教と思われる人物が含まれ, マンローの種々の悩み事 (経済問題や交友関係) の相談にのっていたことが高くランクされる背景となっていると考えられる。

4.5. アイヌとの関わり

アイヌ情報への接し方に関しては, アイヌのお手伝い (Servant)⁽¹¹⁾ や親類のおばあさん (Servant's Relative) から Chiyo に向かって情報の流れが見られるようにチヨの功績を認めることができる。アイヌの長老たちで, Uesanash と Rennuikesh (日本名は工藤貞助で, アイヌ名の正確な発音は不明) は, Shirambe, Kotan-pira らとともにマンローに対し, 重要な伝統的民族知識を伝達してくれた人物であることがマンローの著作や書簡のなかでも明らかにされているが, ネットワークグラフ (グラフ2) では他のコミュニティー内の人物とはやや離れたポジションをとっていることがわかる。特に Rennuikesh は道東の藻琴からマンローがたびたび呼び寄せていた人物であり, 二風谷のコミュニティーのなかでは若干特異な存在だったことを示唆している。例えば, マンローが Seligman に自慢げに伝えた upshoro kut (女性の神聖な帯) 資料を収集したときのエピソードでは, Rennuikesh がマンローに請われて製作したイケマの像がお手伝いの少年 (Servant's Boy) を生命の危機に陥れた元凶としてアイヌの病気診断の女性 (Tusu Woman) と長老の一人 (Shirambe) に非難されている。このときはマンローが近代医療でその少年の命を救い, 事なきをえるが, これを契機に周辺のアイヌがマンローに次第にこころを開く過程が綴られる (RAI: MS249/5/9)。そのような重要なアイヌ文化にかかわる情報の往来がこのグラフ2に表れている。このことは, 中心性の数値でも Shirambe と Kotan-pira が高い順位にとどまる一方で, Rennuikesh と Uesanash はネットワーク内の人物内の中心性の点で, どの指標を用いても中位以下にとどまっていることから明らかである。特に Uesanash はネットワーク内全人物中の最下位層にランクされているのは想定外で

あった。

マンローの研究を助手として補助したり、インフォーマントとして支えたアイヌ人物では、他に Jensuke（善助）とマンローの晩年の活動に大いに協力した Nisukrekuru がいる。後者は二谷国松のこととされる。いずれも中心性のスコアの点で Shirambe ほどではないにせよ、Kotan-pira に近い重要な位置を占めている。

中心性のスコアが他のだれよりも大きく分かれた興味深い人物は、Tusu Woman である。少年の病気の診断をおこなったこの女性は、近接中心性で 64 位、固有ベクトル中心性で 61 位と最下位付近にランクされているが、アクターインフォメーション中心性では中の上の 27 位に位置づけられ、逆に次数中心性で 11 位、媒介中心性で 13 位と高位にランクされるなど、互いに大きく食い違う判定結果が示された。どの部分に重心をおいて評価するかで、中心性の数値は変動があるとはいえ、マンローがセリグマン宛の書簡（RAI: MS249/5/9）で長々と言及するなど、Tusu Woman 自身がマンローやインフォーマントに対して影響力を行使するなど無視できないインパクトを与えていることはやはり見逃せない。Tusu Woman のケースは、単一ではなく多数の中心性の指標を用いてネットワーク内の位置を数値化することの重要性を教えてくれる。

4.6. まとめ

本稿では書簡に記された日付をもとに前期と後期に 2 区分することによって、社会ネットワークの時系列的な相違を確認することができた。前期と後期の差違をネットワークグラフから視覚的に、また中心性分析のスコアからは定量的に表現することができたと感じている。前半は博物館資料や考古学研究を媒介とした人間関係であり、資料の研究、収集、搬送において関心を共有しており、研究者や博物館に勤務している人物が多く関与している。一方後半は質量ともに多様な人間から構築されたネットワークであり、利害が複雑に絡み合っている。刻々と変化していくことが当然であるとも考えられる社会ネットワーク関係を、量的には限られた資料から復元するのはかなり困難なことである。しかし、とりわけ前期のデータ数の少なさにもかかわらず、比較的単純なネットワーク関係を見いだしたというよりは、目的意識のかなりはっきりしたネットワーク関係の特徴を抽出できたように思う。社会ネットワーク分析によって従来の方法では気づくことのできなかった特徴、例えば前期と後期のネットワークの重なりがほとんど見られないことや、マンローのアイヌ研究における重要なインフォーマントであった人物もネットワーク中心性には相当の格差があった点、および日東鉦山の責任者や放火犯などの存在の大きさ、聖職者との交友等々を浮き彫りにすることができた。

これまで、多くのマンロー研究で用いられてきた特定個人の行為や努力・業績に着目した方法では、主観的な見方が避けられず、見落としも出てくるのに対し、社会ネットワーク分析は特定個人の資質や行動を考慮せずに、ネットワーク内のすべての人物の定量化をはかってネットワーク全体における人間関係の特徴を導き出す方法である。この手法の強みは、書簡内に記された名前の記されていない匿名の人物の多くをネットワーク上の特定人物に連結して社会関係を提示することができる点にある。今回は個人をおおよそ特定できる人物だけに限定して分析をおこなったが、将来的にはそれを実現してみたい。また、社会ネットワーク分析は人物を記号処理して特定個人の没個性

化をはかるものではなく、むしろ個々の人物の役割の違いを描出しようとするものである。そのため中心性といった分析ツールを利用したが、これは社会ネットワーク分析で使用される分析の指標のごく一部に過ぎない。そのような課題とともに、上述したグラフやスコアが生じた理由や背景については、今後書簡の中身を詳細に検討し、ネットワーク内それぞれの人物が歩んだ歴史の正確な理解によって解明されるべきであろう。

⑤……………エンパワメントの源泉としてのマンロー資料

マンローが残した膨大な資料を、アイヌを含む現代の人々が、当時のアイヌ文化を再構成するために、あるいはアイヌ文化の伝承のために活用する際に避けては通れない問題がある。異文化を表象する権利がいったいだれにあるのかという疑問の声や、現地の人々の様々な主張や語りを抑圧せずにフィールドワークを実施し、その結果としての民族誌を産みだすことの困難さをめぐる議論が沸きおこっているからである〔クリフォード／マーカス 1996〕。それゆえ、マンローのフィールドワークの手法は実際のところどのようなものだったのかなど、マンローのアイヌ研究の意義を改めて問い直すことは決して無駄ではないだろう。

社会ネットワーク分析による今回の研究成果は、マンローが収集したデータを安心して活用するための一つの判断材料となりうる。なぜなら、マンローが村人らなどと交流するなかで、ともに築き上げてきた社会ネットワークという当時の社会関係資本に依拠しながら収集した貴重な民族知識は、匿名の個人々々を含む個人々々の相互作用の結果獲得されたいわば共有の財産とも言うべき性格のものだからである。

「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」実施の過程などを通じ、これまでのアイヌ研究、村人の診療活動、往復書簡の主要な舞台となった二風谷でこれまで3回に渡ってマンローが撮影した写真や映像を、村人に見ていただきながら映像に映っている人物や風景に関してご教示を得るといふ催しやインタビューを実施した。強く印象に残っているのは、お年寄りから若者までが熱心にくいようにそれらを見つめ、マンローとのかかわりのあった年配の村人からは時折笑い声も聞かれ、また互いに熱心に意見を述べあう姿とそれを興味深く見守る若者の姿であった。

マンローが記録した映像を含むドキュメントに加え、それらドキュメントに基づく具体的な研究の進展によって詳細な補足情報が付加され、デジタル環境（例えばインターネットによるそれら資料への接続など）が整備されれば、人々がマンロー資料に直接アクセスする機会が拡大し、郷土の歴史や文化に関する関心や正確な理解が深まると予想される。映像はことに往時の記憶を鮮明によみがえらせる効果を期待できる。肩肘の張らない地域史の自然な理解や文化伝承に道を開くものといえよう。こうした地道な内面のケアも生き甲斐や精神的健康の向上、すなわちエンパワメントの獲得にも寄与すると思われる。エンパワメントとは、個人とコミュニティそれぞれのレベルで肯定的なパワー（権利意識や自尊心など）を増強し、否定的なパワー（支配・暴力などの外的抑圧、自己否定・無能力などの内的抑圧）への対処能力を向上させる意味合いがあるという。本論では社会的マイノリティというパワーを持たない人たちが、力をつけて連帯して行動することによって自分たちで自分たちの状態・地位を変えていこうとする自立的な行動をエンパワメントと定義

する意見にしたがっておく [宮田 2005 : 216]。

さらに自発的に人々との交流の気運が高まり、アイデアを交換することでより充実した資源が共有され、エンパワーメントの性質が醸成され、信頼や互酬性の規範が育まれる可能性がある。信頼があると自発的な交流はさらに加速し、長期的に社会の上に価値のあるものを生み出し、ある共通の目標に向かって協力的行動を加速させる。これは、近年自己実現や精神的な健康の向上にも有用であるとして注目され、信頼・規範・ネットワークなど、協調的な行為を促すことによって社会の効率を高めうる社会組織上の特性を指す「社会関係資本」の概念に近い [パート 2006 : 245]。

このような見通しが成り立つなら、興味を抱いた特定の個人や研究者だけに利益が還元されるフェーズとは明らかに異なり、マンロー資料は社会全体に利益が還元される公共財としての性質を帯びることになる。

おわりに

本稿では、これまで本格的な研究対象とならなかったイングランドとスコットランドにある、マンローと知人の間でやりとりされた書簡を用いて社会ネットワーク分析をおこなった。マンローとマンローを取り巻く人々の全体を当時の第一次資料のみに基づいて復元した。それらは、従来の伝記などによって物語られてきたマンロー像と結局のところ何がどのように違うのかが問われることになる。

おそらくその答えのひとつは、マンローと登場人物との双方向のネットワーク構造にあると言える。一例を挙げると、マンローが自分自身に害悪を及ぼすと信じて疑わなかった人間が、社会ネットワークのグラフ上にもはっきりと表現されており、しかもこれらの人物はマンローから一方的に影響を受けるだけの受動的な存在ではなく、またマンローとの一対一の関係のみで描かれてもおらず、ネットワークの別の人物らとも複雑につながりながらマンローの信用を失墜させる噂を流す回路を形成している。このことは社会ネットワーク分析によらなければなかなか把握しにくい。

苦難に耐え、不屈の意志でアイヌ研究に取り組み、またヒューマニスティックな医師としての責務を全うしようとしたマンローに、せいぜいチヨが献身的にその活動を支えるといった旧来の評価に対し、良好な人間関係のみならず、マンローを繰り返し悩ませる人間関係の存在をも考慮に入れ、さらには近い隣人だけではなく、遠方の人たちとの接点を加えた上でマンローの活動をトータルに判断しようとする試みの方が、二風谷という現地社会の一員として現地の人々と深くかかわる生き方を選んだマンローの日常を、生き生きと反映することにつながっているのではなかろうか。しかし、社会ネットワーク分析がマンロー研究で用いられてきた個人の属性を尊重する従来の手法と互いに対立しあっているわけではない。要はマンローを中心に世界を見るのか、それともマンローとその他の人物の相互作用に光をあてるのかという思想に相違があるのである。

「マンロー関連資料デジタル化プロジェクト」参加機関の署名が完了すれば、UK および日本にある書簡の中身との具体的な対比によって、上記の方向性をより鮮明にできるものと確信している。

謝辞

本稿を作成する上で、いちいちお名前をあげないが、日本とUK双方の「マンロー関連資料デジタル化プロジェクト」のプロジェクト・コーディネーターと研究協力者に大いに便宜を図っていただいた。また、Rachel Smith, James Taylor, 出村文理の諸氏に資料の提供やご教示を仰いだ。匿名の査読研究者2名からは非常に有益なコメントをいただいた。ここにそのことを記し、深甚の謝意を表する次第である。なお、本文中の敬称は略させていただいた。

註

(1)——本稿では、筆者も参加した「マンロー関連資料デジタル化プロジェクト」の一環としてマンロー書簡を研究対象としていることから、マンロー本人を記述する際に社会ネットワーク分析のグラフや表以外ではこのプロジェクトの名称ともなった日本語カタカナ氏名表記を主に採用することにした。

(2)——Arek Bentkowski氏(RAI写真キュレーター)のご教示による。日本では著作権や肖像権とのからみで映像資料を含む民族資料の公開の動きは西欧に比べ低調であり、情報の社会における共同性が低いと思われる。利益がだれにあるかによっては、活用の方策を真剣に検討すべきである。そのためには本プロジェクトのように公開基準の作成と権利者の承諾を得ることによって、一部所蔵者や研究者だけでなく一般への公開を積極的に押しすすめる必要性が痛感される。

(3)——谷自身はこの書簡からわずかに数名の人物を紹介するにとどまっているが、この書簡を谷がマンローに送った手紙(谷はその写しを保存していた)とマンローが谷に送った手紙(これも谷が保存)にわけてそれぞれの登場人物をカウントすると、前者は19人、後者は63人にも達する[手塚2010]。

(4)——そのほとんどが1913年までに書かれ、1通のみ1929年のものがあり、それはSeligman教授と出会った年に軽井沢からCurle宛てに投函されている。この前期に相当する手紙のうち、マンローが書いたものは18通で、他人が書いたものは1通である。

(5)——実際には時間的な変遷を複数の図によって示す

ことはそれほど困難ではないが、少数の図にすべての時間的な変化を盛り込むことには向いていない。

(6)——人名の綴りについては明らかな誤りについてのみ正し、それ以外はアイヌ語名称も含め基本的にはマンローの表記を尊重した。なお、人名が判明しているものでも、公開基準の設定によって名称を明らかにできない人物も数人含まれていることをお断りしておく。

(7)——この情報の流れに関し、書簡以外の既知の事実などは今回の社会ネットワーク分析に含めず、書簡からわかる範囲に限定している。

(8)——<http://www.analytichtech.com/networks/egonet.htm> 参照のこと。

(9)——実際にはこの時期のマンローが多く日本人考古学者と接点を持っていることも事実であり[アバ2005]、NMSに保管されている書簡はイングランドとスコットランド内の人物との関係を示すものが中心となっている。

(10)——なお、Kimura Chiyoは前妻M. J. R. Adeleとの離婚手続きが済み、入籍の手続きを完了してマンローの妻となった1937年6月30日以降はMunro Chiyoと呼称すべきであるが、本稿では特に断らない限り、姓ではなく単にChiyoまたはチヨと表記する。

(11)——二風谷で実施したインタビューでマンロー邸のお手伝いを務めた人物は少なくとも6人判明しており、Aoki Toki(青木とき)氏もその一人であるが、Servantが正確にだれに相当するかは現時点では不明である。

引用文献

- 金子郁容 1992 『ボランティア：もうひとつの情報社会』 岩波書店。
- 金光淳 2003 『社会ネットワーク分析の基礎：社会関係資本論にむけて』 勁草書房。
- 倉田敬子 2007 『学術情報流通とオープンアクセス』 勁草書房。
- クリフォード J. / マーカス G. E. 編 1996, 春日春樹他訳 『文化を書く』 紀伊国屋書店。
- 桑原千代子 1983 『わがマンロー伝：ある英人医師・アイヌ研究家の生涯』 新宿書房。
- 関本照夫 1988 「フィールドワークの認識論」 伊藤幹治 / 米山俊直編 『文化人類学へのアプローチ』 pp. 263-289, ミネルヴァ書房。
- ダンカン・ワッツ 2004 『スモールワールド・ネットワーク：世界を知るための新科学的思考法』 阪急コミュニケーションズ。
- 手塚薫 2010 「マンロー・谷往復書簡による社会ネットワークの復元とその活用」 『年報 新人文学』 7: 216-263。
- 出村文理編 2006 『ニール・ゴードン・マンロー博士書誌：帰化英国人医師・人類学研究者』 私家版。
- 増田直紀 2007 『私たちはどうつながっているのか』 中央公論新社。
- 宮田加久子 2005 『インターネットの社会心理学—社会関係資本の視点から見たインターネットの機能—』 風間書房。
- 安田雪 1997 『ネットワーク分析：何が行為を決定するか』 新曜社。
- 安田雪 2001 『実践ネットワーク分析：関係を解く理論と技法』 新曜社。
- ラファエル・アバ 2005 「ある外国人が見た日本列島の先史文化：N. G. Munro と Prehistoric Japan (1908年)」 『北大史学』 46: 1-24。
- ロナルド S.・バート 2006 「社会関係資本をもたらすのは構造的隙間かネットワーク閉鎖性か」 野沢慎司 (編) 『リーディングスネットワーク論』 pp. 243-277, 勁草書房。
- Mizoguchi, K. 2009 Nodes and Edges: A Network Approach to Hierarchisation and State Formation in Japan. *Journal of Anthropological Archaeology* 28: 14-26.
- Granovetter M. 1974 Getting a Job: A Study of Contacts and Careers. Harvard University Press, Cambridge.
- Hanneman, R. and Riddle, M. 2005. *Introduction to social network methods*. University of California, Riverside (published in digital form at <http://faculty.ucr.edu/~hanneman/> Contents of Chapter 10 Centrality and Power を使用)
- Larson, F. Petch, A. and Zeilyn, D. 2007 Social Networks and the Creation of the Pitt Rivers Musuem. *Journal of Material Culture* 12(3): 211-239.
- Seligman, B. Z. 1996 Preface. In *Ainu Creed and Cult*. Kegan Paul, London.
- Wilkinson, J. 2002 Dr. Neil Gordon Munro, A Generous Benefactor. In *A Scottish Physician's View: Craft and Spirit of the Ainu from N. G. Munro Collection*. The Foundation for Research and Promotion of the Ainu Culture, pp. 58-59.

(北海学園大学人文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010年9月27日受付, 2011年2月21日審査終了)

Publication of Traditional Knowledge and Utilization as “Social Capital”: With a Focus on the Social Network Analysis of the Munro Correspondence in UK

TEZUKA Kaoru

The motives and purposes of Munro’s Ainu study were supposed based on assumptions about his personality and thinking. In addition to his desire for knowledge, his passion for fame through contribution to academia cannot be ignored, but it is difficult to clarify his motives only from the published materials.

Many of the private letters exchanged between Munro and third parties, which are owned by the Royal Anthropological Institute (RAI) and the National Museum of Scotland (NMS), convey the purpose and intention of Munro’s Ainu study and have immeasurable value for understanding them. In order to determine whether the result of Munro’s Ainu study can be appropriately used in contemporary situations, the research process including the relationship with the target people for the research and the research ethics needs to be properly understood.

The actual relationship established between Munro and people inside and outside the research target areas and communities had great influence on the quality and quantity of Munro’s Ainu study. In order to clarify the relationship between Munro and the people surrounding him, we conducted an ego-centric network analysis based on the above correspondence. As a result, characteristics such as the density and centeredness of the network, person as a hub, relationship with Ainu informants and influence of many people inside and outside the communities were clearly shown. These results visually and empirically show that Munro’s Ainu study was driven not only by Munro’s personal qualities and attributes but by the network of various people surrounding Munro.

How the traditional ethnological knowledge collected by Munro should be published with due consideration taken regarding honor, personal rights and privacy rights is an important issue. The research result through the social network analysis will greatly contribute to a positive utilization of the above data as social capital by contemporary people including the Ainu race.

key words: Ainu, N. G. Munro, traditional ethnological knowledge, social network analysis, social capital
